新條約實施準備ニ關スル參考事項取調書

吉田松陰先生遺書

414
A 961

新條約實施準備ニ關スル參考事項

（在英、米、露、獨、伊、佛、澳、蘭各公使、右東調方訓令）

一、國内ニ到來、旅行及住居ニ付

一、國内ニ到來旅行住居スル權利ニ關シ外國人ニ向テ或ハ一般ニ若ハ特別ニ又ハ其國籍、種類若ハ性質ニ因テ何等ノ制限ヲ附スルコトアルヤ

二、内國人ト外國人トノ間及外國人ニシテ住所ヲ定ムル者ト不在者トノ間ニ何等ノ差別ヲ爲スヤ

三、各本國トノ條約ニ依リ各外國人ノ間ニ各差別スルコトアルヤ

四、如何ナル度合マデ旅行券ヲ要スルヤ

五、登錄ヲ要スル場合アルヤ

二、國外驅逐ニ付

一、國外驅逐ハ法令ヲ以テ明定スルヤ又ハ國家主權ノ作用ト看做スヤ

二、如何ナル犯罪ニ對シテ國外驅逐ヲ行フコトヲ得ベキモノトシ又之ヲ實行シツツアルヤ

三、內國人ト外國人トノ間ニ如何ナル差別ヲ為スヤ

三、犯罪人引渡ニ付

一、犯罪人引渡ハ全ク條約ノミニ依テ之ヲ規定スルヤ

二、如何ナル犯罪ヲ引渡スベキモノトスルヤ

三、內國人ヲ外國ヘ引渡スコトアルヤ

四、管轄外ニ於テ如何ナル犯罪アルトキハ內外國人ヲ問ハズ之ヲ處罰スルコトヲ得ベキヤ

四、國籍ニ付

一、如何ナル者ヲ臣民又ハ人民ト為スヤ

二、如何ナル度合迄市民タルベキ權利ヲ土人種或ハ固有人種ニ與ヘ居ルヤ

三、殖民地市民ナル制アルヤ仮令ハ茲ニ人アリ一ノ殖民地ニ於テハ市民權ヲ享有スルモ其父國（即殖民地ノ本

管國）又ハ本管國ノ他ノ殖民地ニ於テハ其權ヲ享有スルコトヲ得ザルコトアリヤ

五、歸化ニ付

一、歸化ノ法制如何

二、如何ナル人ニシテ歸化スルコトヲ得ベキヤ

三、各種ノ權利ニ關シテ本生ノ者ト歸化人トノ間ニ何等ノ差別ヲ為スヤ

四、殖民地ニ歸化スルノ制アルヤ若シ有リトセバ如何ナル度合迄其父國又ハ他ノ殖民地ニ於テ權利ヲ附與セラルベキヤ

六、脫籍ニ付

一、如何ナル者ヲ脫籍者トナスヤ

二、如何ナル場合ニ於テ原國籍ニ復歸スルヤ

七、司法上ノ取扱ニ付

一、訴訟事項ニ付外國人ハ內國人ト同樣ノ權利ヲ有スルヤ

二、逮捕又ハ保証金ニ付內國人ト外國人トノ間ニ何等ノ差別ヲナスヤ

三、裁判所ハ通譯官吏ヲ備置クベキ義務アルヤ

八、不動產ノ所有ニ付

一、内國人ト外國人トノ間ニ何等ノ別アルヤ

二、外國人ハ鑛山又ハ鑛區ヲ所有スルコトヲ得ベキヤ

九、動産ノ所有ニ付

一、外國人ハ内國人同様各種ノ動産ヲ取得、占有スルコトヲ得ベキヤ

二、國債券又ハ地方債券ヲ所有スルノ權利ヲ内國人ニノミ限ルコトアルヤ

三、外國人ハ船舶ヲ所有シ又ハ船舶ノ株主タルコトヲ得ベキヤ若シ株主タルコトヲ得ルトセハ内外國人ノ間ニ於テ如何ナル比例ニテ之ヲ得ベキヤ

四、外國人ハ銀行、鐵道、船渠、造船所又ハ鑛山ノ株主トナルコトヲ得ベキヤ若シ然レバ如何ナル度合迄ナルヤ

五、外國人ハ無制限ニ内國人同様政府ヨリ補助金ヲ仰キ又ハ政府ノ特別ナル保護ヲ受クル各種會社ノ株主トナルコトヲ得ベキヤ

十、外國會社（コーポレーション）（特別ノ法律ニ依テ組織セラルヽモノ仮令ハ我日本銀行正金銀行ノ類）及株式會社ニ付

一、外國會社及株式會社（殊ニ銀行、抵當貸（トラスト）金、保險、船舶業ノ）ハ何等條件ヲ附セラレ又ハ何等條件ヲモ附セラレズシテ其業務ヲ行フコトヲ許サレ居ルヤ

二、若し條件アリトセバ如何ナル條件ナルヤ

三、外國會社又ハ株式會社ノ業務ヲ行フコトヲ得ル權利ハ條約ニ依テ之ヲ定ムルヤ

四、内國冨籤ト外國冨籤トノ間ニ何等ノ差別ヲナスヤ

十一、商業ニ付

一、商業ニ關シ内國人ト外國人トノ間ニ何等ノ差別ヲナスヤ

二、外國人ハ何等特別ナル許可ヲ要スルヤ

三、商業ニ從事スル外國人ハ住所ヲ定ムルコトヲ必要トスルヤ

四、右等外國人ニ對シテハ或種ノ品ヲ賣買スルコトヲ特禁シ居ルコトナキヤ

十二、沿海貿易及殖民地間又ハ殖民地ト本國間貿易ニ付

一、外國人又ハ外國船舶ハ沿海貿易ニモ又殖民地間又ハ殖民地ト本國間貿易ニモ從事スルコトヲ得ザルヤ

二、若し全然從事スルコトヲ得ザルニ非ズトセバ如何ナル制限アルヤ

十三、漁業ニ付

一、外國人又ハ外國船舶ハ漁業ニ從事スルコトヲ得ザルヤ

二、若シ全然從事スルコトヲ得ザルニ非ストセバ如何ナル
制限アルヤ

十、職業ニ付

一、外國人ハ官吏公吏タルコトヲ得ベキヤ

二、如何ナル職業ハ内國人ニ限ルヤ

三、外國人ハ總テノ場合ニ於テ會社(コーポレーション)及株式會社ノ役員及
重役タルコトヲ得ベキヤ

四、若シ得ザルコトヲセバ如何ナル取除アリヤ

五、外國人ハ總テノ場合ニ於テ遺言管財人、選定管財
人、後見人、保佐人、被信托人タルコトヲ得ベキヤ

六、若シ得サルコトヲセハ如何ナル取除アリヤ

七、外國人ハ全ク内國人同樣各種ノ農業工業鑛業ニ從事
スルコトヲ得ベキヤ

八、若シ得ザルコトヲセハ如何ナル取除アリヤ

九、商船ニ於テ其士官又ハ船員ノ一部分ハ必ズ内國人タルコ
トヲ要スルヤ

十、外國人ニ對シ新聞又ハ雜誌ノ發行ニ付特別ナル制限ヲ
附スルヤ如何

十一、外國語ニテ發行スル新聞又ハ雜誌ニ關シ何等制限ヲ
附スルヤ如何

伊國之分

十二、外國人ハ政治上ノ集會ニ加ハルコトヲ禁シラレ居ルヤ

十三、外國醫科大學、法科大學若ハ醫學校、法學校ノ學位証書ハ如何ナル場合ニ於ケルモ内國ニ於ケル同種大學若ハ學校ノ學位証書ト同一ニ遇セラルヽモノナルヤ

十四、外國某大學若ハ某學校ニシテ前項ノ点ニ關シ特典ヲ享有スルモノアラバ其校名如何

若シ出來得ベクハ前記各事項ニ關スル各法令ノ全文若クハ拔萃ヲモ添ヘテ報告アリタシ

外國人取扱ニ關スル伊國法制ノ精神

一千八百六十年ノ頃伊國一統事業ノ稍々完成シタルニ當リ伊國創業政治家ハ從來伊太利半島各小邦ニ存在シタリシ諸種ノ法制ヲ廢シ新伊國ニ共通スル法制ヲ設クルノ必要ヲ感シ憲法ハ千八百四十八年カルロ、アルベルト帝ノサルデーニヤ王國ニ發布セルモノヲ伊國全体ニ施行スルコトヽシ其他行政ニ關スル諸法規モ又多少ノ修正ヲ經タル後之ヲ全伊國ニ施行スルコトヽナレタレトモ獨リ民法ニ至リテハ更ニ之ヲ制定編纂スルノ已ムヲ得サルヲ認メ有名ナル制法家ピザネリー氏ニ此大任ヲ托セリ然ルニ當地伊

國ニ於テハ自由平等人類博愛ト云フ如キ主義ノ學
說盛ンニ行ハレタリシカ故ニ「ボアソナード」氏カ民法ヲ編纂
スルニ際シテモ極メテ自由ナル主義ニ基キ萬般ノ規定
ヲ立テ從ヒテ伊國ニアル外國人ハ如何ニ之ヲ待遇スルヤ
ノ問題ニ対シテモ外國人ハ伊國人同樣ノ私權ヲ享有スル
コトヽナシ之ヲ民法草案中ニ掲ケタリ而シテ右民法草
案ノ上院ノ議事ニ上ルニ至リ同委員會ニ於テハ外國人
ハ無條件ニテ伊國人同樣私權ヲ享有スト云フ規定ヲス
テ外國人ニ対スル過度ノ讓與ナリトシ伊國内ニ居所ヲ
有スル外國人ニハ伊國人同樣私權ノ享有ヲ許スコト

ニ修正シタリシカドモ下院ニ於テハ右ノ制限ヲ以テ伊國カ世
界各國ニ率先シ始メテ實施スルノ名譽ヲ負フ所ノ自由
主義ヲ傷フモノト認メ遂ニ極メテ廣濶ナル文字ヲ以テ
無条件ニテ外國人ヲシテ伊國人同樣私權ヲ有セシムル
コトニ定メ之ヲ民法草案三條ニ明記セリ曰ク「外國人ハ内
國臣民ニ屬スル私權ヲ享有スルヲ得」ト此法文ハ外國
人取扱ニ関スル伊國法制ノ精神ナルカ故ニ反対ノ法文
ナキ限リハ私法上ニ於テ内外國人ヲ全ク同一視スルモノ
ニシテ本調査書ノ諸問題ヲ解釈スルノ基本タルモノナリ
案スルニ伊國ニ於テ外國人ノ取扱ニ関シ右ノ如ク歐洲諸

國ニ率先シ極メテ自由ニ又極メテ寛容ナル主義ヲ實
行シタルハ外面ヨリ之ヲ察スレハ伊國当時ノ法律家カ
凡ソ私權ナルモノハ人類自然ノ必要ヲ充タスニ欠ク可カ
サル權利ニシテ其内國人タルト外國人タルトヲ問ハス之
レ無ケレハ生息スルヲ得サル所ノモノナルカ故ニ之ヲ人類一般
ニ認ムルヲ当然トスト云フ自由主義ノ經理論ヲ信シタ
ルヨリ起クタルコトナレトモ其實ハ重ニ伊國經濟上ノ事
情ニ基ツキタルモノナルヘシ蓋シ伊國ハ歐洲ノ樂園ニシ
テ山水明媚氣候温和ナルカ故ニ歐米ノ富豪紳士杖
ヲ此邦ニ曳クモノ甚タ多ク伊國資産ノ大部分ハ外國

人ノ遊樂的費用ニ源シ又殖産工業其他通商等ノ機関
モ他諸大國ニ後ル、處アルヲ以テ大ニ外國ノ資本等ヲ内
國ニ流入セシムルノ必要アルニ依リ可成外國人ニ利便ヲ與フル
以テ伊國ノ政略トナス可キヿ多言ヲ俟タス從テ外國人ニ
與フルニ内國人同樣ノ私權ヲ以テシ其來住ヲ奬励スルノ
微意ヲ立法ニ寓シタルモノナルベシ
外國人ニ関スル伊國法制ノ精神ノルヤ即チ斯ノ如シ依ニ此調
書ヲ讀ムニ當リ毎ニ此精神ヲ了知シ本案所載ノ事項ヲ
査閲セシニハ外國人ニ関スル伊國法律ノ規定ヲ了解スル
ソト蓋シ容易ノ業ナル可キヲ信ス

自是以下逐次諸問題ニ對シ答案ヲ附スルヿ左ノ如シ

一、國内ニ到來、旅行、又住居ニ付

一、國内ニ到來旅行又住居スル權利ニ關シ外國人ニ向ッテ或ハ一般ニ若シクハ特別ニ其國籍種類若シクハ性質ニ因テ何等ノ制限ヲ附スルコトアルヤ

伊國ニ於テハ此等ノ事項ニ關シテ何等ノ制限ヲ附スルコトナク外國人ハ全ク伊國人同樣、權利ヲ有スレ特別ニ積極的明文アルニ非ラズ伊民法第三條規定ノ結果ナリ伊國ト諸外國トノ間ニ締結セル諸條約ニ於テハ皆兩締盟國ノ臣民ハ他國内ニ到來旅行住居ス

ル權利ヲ有スヽ云々ト規定セサルモノナキカ故ニ此等ノ權利ハ條約ノ効果タルカ如ク見エレ𪜈其實決シテ然ラズ伊國ニ於テハ民法第三條ノ結果トシテ諸外國人ハ伊國人ト同シク一樣ニ此等ノ權利ヲ有スルモノニシテ伊國ト他國トノ國際條約ニ於テ此等ノ事ヲ明定セル條約ノ明文ハ相互的ニ書載スルヲ慣例トシ伊國ニ於テハ必要ナキ所ナリ國ニ於テハ必要アル可キカ故ニ特ニ之ヲ明文ニ掲ケタルニ外ナラサルナリ

二、內國人ト外國人トノ間及外國人ニシテ住所ヲ定ムルモノト不在者トノ間ニ何等ノ差別ヲ為スヤ

伊國內ニ到來旅行及住居ニ付內外人間及外國人ニシテ住所ヲ定ムルモノト不在者トノ間ニハ何等ノ區別ヲ為スコトナシ外國人ハ其住所ヲ定ムルト否トニ拘ラス伊國人ト同樣ノ權利ヲ有ス是レ亦民法第三條ノ結果ナリ

（外國人ニシテ住所ヲ定ムルモノト然ラサルモノトノ間ニ私權ノ差別アリヤトノ問意ナラハ住所ヲ有スル外國人ハ國外驅逐ヲ受ケサルノ權利アリ又伊國船舶全体ヲ所有スルノ權利アリ）

三、各本國トノ條約ニ依リ各外國人ノ間ニ各差別スルヿアリヤ

伊國内ニ到來旅行及住居スルノ權利ハ外國人カ其本國ト伊國トノ間ノ條約ニ依テ得タル權利ニアラスシテ夫ノ民法第三條ニ依リテ有スル權利ナルカ故ニ國際條約ニ直接及對ノ明文アラサル限リハ凡テノ外國人ハ其國籍如何ヲ問ハス（仮令無條約國人タリト）伊國人ト同樣ナル權利ヲ有スルモノトス

四、如何ナル度合迄旅行券ヲ有スルヤ

已ニ説明シタル如ク外國人ノ伊國内ニ到來旅行及住居スルコトニ關シ伊國人ト同樣ノ權利ヲ有スルハ民法第三條原則ニ基ツクモノナルカ故ニ伊國ニ於テハ法律

又ハ習慣上旅行券ヲ要スルノ場合決シテ無之但シ何事カ誤解又ハ変変等アル場合ニ於テ外國人タルモノ旅行券ヲ所持スルニ於テハ直ニ自己ノ國籍及身分等ヲ知ラシムルヲ得ベク實際上甚タ便利ナリ

五、登録ヲ要スル場合アルヤ

決シテ之ト无シ

二、國外驅逐ニ付

一、國外驅逐ハ法令ヲ以テ明定スルヤ又ハ國家主權ノ作用ト看做スヤ

一千八百五十九年發布ノ伊國刑法ニ於テハ國外驅逐ヲ以テ怠惰、無宿流浪(vagabondage)及所有權侵害ノ罪ニ對スル附加刑トナシ外國人ニシテ伊國内ニ於テ右等ノ罪行アリタル時ハ當然國外ニ驅逐スルコトニ定メタリシカ一千八百八十九年ニ於テ現行刑法ト同時ニ發布セラレタル現行公安法ニ於テハ國外驅逐ニ關シ明瞭ナル規定ヲ設ケタリ左ニ之ヲ譯出セン

第九十條

刑罰ニ處セラレタル外國人ハ其出獄後之ヲ伊國境外ニ驅逐スルカ為メニ國境ニ送致スルヿヲ得ベシ、内務大

臣ハ公共秩序上ノ理由ニ依リ伊國内ヲ通行シ又ハ單ニ居所ノミヲ有スル外國人ヲ國外ニ驅逐スルヿ命令ヲ發スルヿヲ得但シ該規定ハ歸化ノ方法ニ依リ伊國人ノ分限ヲ得タルモノニ之ヲ適用セス

第九十一條

驅逐セラレタル外國人ハ内務大臣ノ特別ノ許可ヲ得ルニ非サレハ再ヒ伊國内ニ入ルコトヲ得ス

前項ノ規定ニ反シテ右監禁ノ終リタル後ハ又タ直ニ國外ニセラルベシ而シテ右監禁ノ終リタル後ハ又タ直ニ國外ニ驅逐セラルベシ

第九十二條

國境ニ接スル縣知事ハ公共秩序上ノ理由ニ依リ緊急ノ場合ニ於テハ本法第九十條ニ規定セル內務大臣ノ權力ヲ行ヒ及ビ自己ノ身分ニ就テ明言スル能ハズ又ハ無資力ナル外國人ノ伊國內ニ入リ來ルヲ拒ムヿヲ得ベシ

前掲法文ヲ一讀スレハ伊國ニ於テハ國外驅逐ノ事ヲ以テ法律又ハ勅令ニ明定スベキモノトセズシテ內務行政ノ一事項ト見做シ內務大臣ノ職權ニ一任シタルヲ知ルベシ故ニ內務大臣ハ各場合毎ニ公共安寧上ヨリ考察ヲ下シ其政治的責任ヲ以テ國外驅逐ヲ行フヘキヤ否ヤヲ判斷スヘキモノニシテ毫モ法律又ハ勅令等ヨリ拘束セラルヽコトナキナリ而シテ前掲第九十二條ニ於テ國境ノ縣知事ニ對シ外國人驅逐ノ權限ヲ與ヘタルハ一千八百四十九年ノ佛國法律ヲ踏襲シタルモノニシテ佛國ノ縣知事等カ該法律ノ委任權限ヲ濫用シテ弊害多カリシヲ根據トシ該條ノ規定ヲ廢止セントスル議論モアレトモ伊國ニ於テハ右ノ權力ニ關シ實際左程ノ濫用ヲ惹起シタルコトハ未タ曾テ之レ無キナリ又前掲公安法ノ伊國衆議院ノ議事ニ上リタルニ當リテハ該法案審査委員會ハ凡ソ刑罰討處セラレタル外國

人ハ其出獄後皆之ヲ伊國境外ニ驅逐スルモノトスト云フ規定ヲ設ケンコトヲ主張セレカ此ノ如キ規定ハ慘酷ニ過キ且ツ實際無用ナリトノ說勝ヲ制シ遂ニ內務大臣ニ於テ万般ノ事情ヲ考究シ其政治的責任ヲ以テ決行スルコト、定メタリ

驅逐セラルヘキ外國人ノ國籍ヲ明ナル時ハ其國籍國境ニ之ヲ送致スヘク而シテ原籍國ハ之ヲ受取ルヲ以テ其ノ國際上ノ義務トスルコト固ヨリ論ヲ俟タスト雖モ其ノ國籍不分明ナル片ハ先ツ之ヲ一定ノ場處ニ固着セシメ國籍ノ搜索ヲ為シ尚ホ國籍遂ニ之ヲ知ルコト

ヲ得スンハ無籍人トナシ之ヲ國外ニ驅逐シ其往ノ處ニ任スルノ方法ヲ取ルナリ

二、如何ナル犯罪ニ對シテ國外驅逐ヲ行フコトヲ得ヘキモノトシ又之ヲ實行シツツアルヤ

前問ニ於テ說明シタル如ク伊國ニ於テハ國外驅逐ヲ以テ刑罰ノ附加処分及ヒ純粹ナル行政処分ト見做シ內務大臣ノ責任ヲ以テ執行スルモノナルニ依リ如何ナル犯罪ニ對シテナリトモ內務大臣ノ要ト認ムル場合ニ於テハ直チニ實行スルヲ得ヘキモノナリ

又何等ノ犯罪ナキ外國人ニ對シテナリトモ內務大臣ニ

於テ右外國人ノ伊國内ニ存在スルコトヲ以テ公共ノ安寧ニ害アルカ故ニ之ヲ國外ニ驅逐スルノ必要ヲ認ムルトキハ是亦純粹ナル行政処分トシテ驅逐ヲ命スルコトヲ得ヘシ畢竟國外驅逐ノ件ハ全ク内務大臣ノ職權ニ屬スルモノナレトモ實際ノ前例ニ就テ之ヲ見ルニ公安ヲ害スル極メテ著明ナル場合ニ非ラサレハ之ヲ實行シタルコトナシ前内閣首相クリスピー氏ハ有名ナル威壓家ナルニ依リ外國新聞記者ハ勿論外國女教師等迄モ陸續國外ニ驅逐シ一時公論囂々タリシコトアレトモ現内閣ハ其成立以來已ニ滿一ヶ年ニ達シタレトモ未タ曾

テ一度モ國外驅逐ノ処分ヲ行ヒタルコトナシ

三、内國人ト外國人トノ間ニ如何ナル差別ヲ為スヤ

伊國法制ノ精神ハ伊國人ハ其分限ヲ喪失セサル以上ハ仮令其罪行ノ原因ニテ刑罰ヲ受クルコトアルモ常ニ伊國領内ニ居住シ法律ノ保護ヲ受クルノ權利アリト云フニアリテ伊國人ニ対シテハ決シテ國外驅逐ヲ行フコトヲ得サルモノト定メタリ是レ前問公安法第九十條ノ法文ヲ一續シテ明瞭ナル處ナリ且ツ獨リ伊國人ニ対シテ國外驅逐ヲ行フコト有スル外國人ハ之ヲ國外ニ驅逐スルコト能ハサルノ法規

ナリ（同條第一項第六參看）是レ伊國法律ニ於テ住所ト稱スルハ人ノ業務又ハ利益ノ中心ナルカ故ニ外國人ニシテ已ニ伊國ニ右ノ住所ヲ有スルモノハ或ル点ニ於テ伊國人ト同一視スヘキ所アルノミナラス右ノ如キ外國人ヲ驅逐スルニ於テハ其損害過大ニシテ慘酷ヲ極ムルニ付之ニ対シテハ國外驅逐ヲ行ハサルコトヽ定メタルナリ

國外驅逐ノ事ニ関シ最後ニ一言スヘキハ國外驅逐ノ命令ニ対スル抗告（レクール）則チ是レナリ或学者ハ右ノ如キ命令ニ對シ抗告ヲ許サヽルハ内務大臣以下ノ專權

ヲ濫長セシムルモノナルカ故ニ抗告ヲ許スヘシト唱道スレトモ是レ畢竟一個ノ希望ニ過キス伊國法律ニ於テ外國人ハ伊國人ト同シク私權ヲ享有スト規定シタルカ故ニ外國人ハ其私權侵害ノ場合ニ當リ裁判所ニ抗告シテ其救濟ヲ求ムルヲ得ルハ固ヨリ論ヲ俟タスト雖外國人カ伊國内ヲ通行スルカ如キハ純粹ナル私權ト稱ス可キモノニアラサルカ故ニ其國外驅逐ハ私權ノ侵害ト云フ可ラス從テ其抗告ヲ許ス可ラストノ説勝ヲ制セリ況ンヤ行制處分ニ對シ抗告スルヲ得ルモノハ其ノ箇條毎ニ之ヲ明記スルヲ以テ

伊國法律ノ慣習トナスニ拘ラス右國外驅逐ノ行政命令ニ対シテハ抗告スルヲ得ルト云フ何等ノ明文ナキニ於テヲヤ且ツ從來ノ實例ニ依ルモ國外驅逐ニ対シテハ抗告ヲ許シタルコトナク驅逐セラレタル外國人ニシテ伊國内ニ再來セントスルトキハ内務大臣ニ歎願書ヲ提出シ其許可ヲ得テ其希望ヲ達シタルコトアルノミナリ

三、犯罪人引渡ニ付

一、犯罪人引渡ハ全ク條約ノミニ依テ之ヲ規定スルヤ

伊國ハ歐洲諸國ニ対シテハ勿論南米諸國ニ対シテモ皆交互主義ニ基ケル犯罪人引渡條約ヲ締結シ其規定ニ依リテ互ニ犯罪人ノ引渡ヲ行フヲ原則トスレトモ一千八百八十九年發布ノ刑法第九條ニハ當國カ犯罪人引渡シニ関シテ執ル所ノ大主義ヲ掲ケ伊國人ハ之ヲ外國ニ引渡サルコト及命令外國人タリトモ政治上ノ犯罪人及ヒ政治ニ関連スル犯罪人ハ之ヲ外國ニ引渡サルコト及ヒ犯罪人引渡シハ行政部ノ專擅ヲスル

之ヲ為スコトヲ得ス必ス右犯罪人所在地管轄裁判所ノ同意ヲ得ルヲ要スル趣ヲ表明セリ則チ伊國ニ於テハ犯罪人引渡條約ナキノ故ヲ以テ必ス其引渡ヲ拒ムニ非スシテ行政部ハ各場合ニ應シ諸般ノ事情ヲ審査シテ外國政府ノ請求ニ應スヘキヤ否ヤヲ判断スルノ取極メナリ而シテ伊國カ犯罪人引渡ノ事項ニ関シ右ノ如ク自由寛容ノ主義ヲ執ルニ至リタル理由ニ就テハ少シク伊國近世ノ立法史ヲ説明スルコト蓋シ無用ノ業ニ非サルヘシ

伊國有名ノ法學家ニシテ屢々司法大臣及外務大臣ノ

職ヲ帶ヒタルマンチニー氏ハ伊國法制諸事業ニ最モ関係アリタル人ナルカ同氏ハ伊國創業的外交家カブールヽ伯ノ衣鉢ヲ襲ヒ常ニ称シテ極端ナル自由主義ヲ執リ死刑ヲ廃止シ國際法万國協會ヲ組織シ及ヒ國法ノ下ニ於テ内外人ヲ全ク同一視スルノ主義ヲ民法中ニ表記スルニ至リタル如キ皆其勢力ニ基カサルモノナキ程ナリ千八百八十一年同氏ノ司法大臣タリシ際氏ハ犯罪人引渡ニ関スル事項ニ就キ詳密ナル法律ヲ制定スルノ目的ヲ以テ伊國屈指ノ名士ヲ談法起草委員ニ任シ諸委員ハ長日月間調査研究ノ後一ノ法案ヲ具シ大臣

ニ報告セリ右法案ハ極メテ自由ナル正理主義ニ基キ内
國人ト雖モ之ヲ外國ニ引渡スヿ、外國ノ請求ナシト雖
モ引渡スヿ、外國ニ於テ同樣ノ場合ニ於テ交互的ノ
取扱ヲ為スノ条件ヲ必要トセサルコト等ノ規定アリ
タレ共該法案ハ議會ニ於テ過度ニ理想ニ走リ國家
實際ノ利益ヲ忘却シタルモノナリトノ誚リモアリ且ツ
當時恰モ刑法改正ノ議盛ンナリシ際ニシテ犯罪人
引渡ノ事項ノ如キハ之ヲ特別ノ法律トスルヨリ寧ロ
刑法中ノ一規定トスル方適當ナリトノ論勝ヲ制シ
遂ニ廢案トナリ後年新刑法制定ノ際前掲如

ク同第九條トナリテ現出スルニ至レリ該條ノ精神ハ犯
罪人引渡法案ニ比スレハ自由寛容ノ度頗ル減シタ
リト雖モ其條約以外ニ於テモ犯罪人引渡ヲ認メタ
ルカ如キハ伊國近世立法事業ニ貫流セル自由主義
ノ思想ニ基ツキタルモノニ外ナラサルナリ

二、如何ナル犯罪ヲ引渡ス可キモノトスルヤ

國際條約ニ依ルニ非スシテ國家ノ主權ヲ以テ犯罪人
ヲ外國ニ引渡ス場合ニ於テハ政府ノ責任ヲ以テ引渡
スヘキ犯罪タルヤ否ヤヲ判決スルモノナリ（但シ刑法第九條
ニ規定スル如ク政治犯及ヒ之レニ關連セル犯罪ハ此限リニ非ス

本項第一問參照）ト雖モ條約ノ存在スル場合ニ於テハ其條約上ノ規定ニ依リ引渡スヘキ犯罪タルヤヲ決定スルモノナルコト固ヨリ論ヲ俟タス依テ伊國カ諸外國ト締結セル犯罪人引渡ニ係ル條約ノ規定ヲ見レハ伊國カ外國ニ引渡ヘキモノトスル犯罪ヲ知ルヲ得ン左ニ伊國最近ノ犯罪人引渡ノ一タル伊太利及モンテネグロ間犯罪人引渡條約（千八百九十二年八月二十九日調印）第二條ヲ抄出セン（別冊第一号）

第二條

次ニ掲ク犯罪ハ之ヲ引渡スヘキモノトス

一、親殺シ、子殺シ、謀殺毒殺故殺

二、重大ナル傷毀

三、重婚、強姦、墮胎、未成年者誘拐、等

四、棄兒、兒女誘拐、及隱藏等

五、放火

六、建造物、蒸汽又ハ電信器械破壞、

七、公文書破毀、

八、兇徒嘯集、五百法以上ノ竊盜ニシテ形狀重キモノ、

九、身体若シクハ財産ニ關スル恐喝罪ニシテ死刑徵役若

クハ重禁錮ノ刑ニ當ルモノ、

十、身体ノ自由及ニ住所ノ不可侵権ニ對シテ一私人ノ犯シタル罪行

十一、貨幣偽造變造等

十二、偽証、偽譯、偽鑑定等、

十三、偽誓

十四、官吏受賄、官金私用

十五、詐偽破産、及ヒ破産中犯シタル詐偽、

十六、詐偽取財、損害高五百法以上ナル信用ニ背クノ罪、

十七、伊國及モンテネグロー海上法ニ於テ規定セル場合以

外ニ於テ船長カ商船漁船其他船舶ヲ遺棄シタル犯罪

十八、商船漁船其他船舶ヲ破壞シ又ハ淺瀬ニ乗上ケシノ其他之ニ類似ノ所為アリタル船長其他乗組員ノ犯罪

十九、本條約規定ノ犯罪ニ依テ得タル物品隠蔽罪、

右ニ掲クル犯罪ノ豫備ト雖モ両國ノ法律ニ於テ處罰スルトキハ之ヲ引渡スコトアルベシ

三、内國人ヲ外國ニ引渡スコトアリヤ

伊國現行刑法第九條第一項ニ明文アリ曰ク内國人ハ之ヲ外國ニ引渡スコトナシト、伊國ニ於テモ一時ハ内國人

ト雖モ之ヲ外國ニ引渡スコトノ裁判上ノ正理ニ合スト
理由ニ依リ内國人引渡論大ニ熾ンニシテ現ニ千八百八
十一年ノ法律案ニ於テハ其明條アリタレ𪜈該案ハ已
ニ説明セル如ク議院ニ於テ廢棄セラレ其後新刑法
編成ノ際ニハ該件ニ關シ保守論勝ヲ制シ前掲明
文ヲ掲クルニ至レリ

四、管轄外ニ如何ナル犯罪アル片ハ内外國人ヲ問ハス之ヲ
處罰スルコトヲ得可キヤ

該件ニ就テハ伊國ニ於テモ學説久シク一致セサリシガ一
千八百八十九年新刑法發布ト共ニ法典上明文トナリ

第四條以下ニ表掲セラルヽニ至レリ依テ第四條以下該問
題ニ關係アル法條ヲ左ニ譯出セン

第四條

伊國人タルト外國人タルトヲ問ハス外國ニ於テ國ノ安
寧國璽、通用貨幣、及公共ノ信用証券偽造ノ罪ニシ
テ伊太利國法律上最高度ニ於テ五年以上ノ自由刑
ヲ課スルモノハ同國法律ニ依テ之ヲ處罰ス

司法大臣ノ請求アル片ハ仮令ヒ已ニ外國ニ於テ裁判
セラレタル後ナリトモ更ラニ以太利國ニ於テ審判セラ
ルヘシ

犯罪人ニシテ伊太利國内ニ存在スル時ハ仮令五年以下ノ刑罰ニ當ル犯行ニ對シテナリトモ前両項ノ規定ヲ適用ス

第五條

伊國人タルト外國人タルトヲ問ハス外國ニ於テ前條所陳ノ犯罪ノ外伊太利國法律ニ於テ少クトモ三年以上ノ自由刑ヲ課スル処ノ罪行ヲ侵シタル後伊國境土内ニアル時ハ伊太利法律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

但シ右等ノ犯罪ニ對シテハ刑期六分ノ一ヲ減シ且ツ無期徒刑ニ代フルニ二十五年乃至三十年ノ有期徒

刑ヲ以テスベシ

前項ノ場合ニ於テ三年以下ノ刑罰ニ當ルモノハ被害人ノ告訴又ハ外國政府ノ請求アルニ非サレハ之ヲ審判セサルモノトス

第六條

外國人カ外國ニ於テ第四條規定以外ノ犯罪ヲ伊國人又ハ政府ニ對シテ犯シ而シテ其犯罪カ伊太利法律上其低度ニ於テ一年以上ノ自由刑ニ當ルモノニシテ右犯罪人カ伊國内ニアル時ハ伊國法律ニ據テ之ヲ処断スベシ

但シ右等ノ犯罪ニ対シテハ刑期三分ノ一ヲ減シ且無

期徒刑ニ代フルニ二十年以下ノ有期徒刑ヲ以テス
ヘシ
前項ノ規定ハ司法大臣ノ請求又ハ被害人ノ告訴
アル場合ノ外ハ之ヲ適用セサルモノトス
外國人外國ニ於テ外國人ニ對シ犯罪アリテ伊國ニ
在留シ司法大臣ノ請求アル場合ニ於テ下ニ掲クル
二條件ヲ具フル件ハ本條第一項ノ規定ニ拠リテ之
ヲ處斷ス
第一條件、伊太利國法律上最低度ニ於テ三年以
下ノ自由刑ヲ課スヘキ犯行アル丁

第二條件、犯罪人引渡シ條約右外國ト存在セサル事
又ハ犯行地又ハ犯人屬屬ノ政府カ伊國ヨリ提議セ
ル引渡ヲ承諾セサル丁
第七條
第五條及第六條規定ノ場合ニ於テ下ニ掲クル項ニ
當ル件ハ之ヲ裁判ニ付セサルモノトス
第一、第九條首項ノ規定ニ依リ犯罪人引渡ヲ許サル件
（調査者註、政治犯及政治關係犯ノ場合ナリ）
第二、已ニ外國ニ於テ免許トナリ又ハ服刑シ或ハ刑罰ノ
消滅シタル件

伊國人ノ外國ニ於テ犯シタル罪ニ對シ外國ニ於テ已ニ刑罰ヲ宣告シ而シテ伊太利法律ニ於テ右刑罰ニ對シ公權停止又ハ其他ノ失權ヲ規定シタル場合ニ於テハ伊太利裁判所ハ檢察官ノ請求ニ依リ右犯罪ニ對スル外國裁判宣告ヲ有効ナリト宣言スルコトヲ得但シ被告人ハ更ラニ伊太利裁判所ノ裁判ヲ請求スルノ權利ヲ有ス

四、國籍ニ付

一、如何ナル者ヲ臣民又ハ人民トナスヤ

伊國封建時代ニアリテハ普通人民（ミナセン）ノ外ニ無籍者ナルモノアリテ國法上何等ノ權利ヲモ有セサリシカ故ニ當時ニアリテハ如何ナルモノヲ人民トナシ如何ナルモノヲ無籍者トナスヤハ最重要ナル問題ナリシカ千八百四十八年憲法發布ノ後ハ同第二十四條ニ凡ソ伊國ノ住民ハ其称号若シクハ階級ノ如何ニ拘ラス法律ニ對シテ同樣ナリト規定シタルニ依リ該問題ハ左程重要ナラサルニ至レリ

若シ本問ノ意ニシテ如何ナルモノヲ伊國人民トナシ之ヲ外國人ヨリ區別スルヲ得可キヤト云フニアラハ民法第四條以下第八條ニ於テ明カニ其答解ヲ與ヘタリ之ヲ左ニ譯出セン

第四條、

伊國人民タル父ノ子ハ之ヲ伊國人民トナス

第五條

子ノ出生以前父伊國人民タル分限ヲ失ヒタル場合ニ於テ子カ伊國内ニ生シ且ツ伊國内ニ居處ヲ有スル片ハ其子ハ伊國人民トス

但シ右ノ子ハ成年ニ達シタルヨリ一ヶ年以内ニ於テ其居所ノ身分取扱吏ノ面前ニ外國ニアル片ハ外交官若シクハ領事官ノ面前ニ外國人タル分限ヲ撰擇セントスル旨ヲ宣言シテ外國人タル分限ヲ取得スルコトヲ得

第六條

子ノ出生以前伊國人民タル分限ヲ失ヒタル父ノ子ニシテ外國ニ生レタル者ハ之ヲ外國人トナス

但シ前條ノ手續ニ依リ宣言ヲ為シ且ツ其宣言ヨリ一ヶ年ニ伊國内ニ住所ヲ定ムルニ於テハ伊國人タル分限ヲ取得スルコトヲ得ベシ然レトモ伊國ノ官職ヲ受ケ

若シクハ伊國海陸軍ニ服役シ又ハ外國人タル分限ヲ主張スルコトナクシテ徵發規則ノ条件ヲ充ス者ハ何等右ニ掲クタル如キ手続ヲ為スコトナクシテ伊國人タル分限ヲ得ベシ

第七條

父知レサルハハ伊國人民タル母ヨリ生レタル子ヲステ伊國人民ト見做ス

子出生前母伊國人民タル分限ヲ失フハハ子ニ對シ前二條ノ規定ヲ適用ス

父母共ニ知レサルハハ伊國内ニ生レタル子ハ之ヲ伊國人

トス

第八條

間斷ナク十年以上伊國内ニ住所ヲ有スル外國人ノ子ハ之ヲ伊國人民ト看做ス但シ商業上ノ理由ニ依ル居住ハ本文ニ所謂住所ニ非ラス

然レトモ右ノ子ハ第五條ニ規定セル手続ニ依リ外國人タル分限ヲ撰擇スルコトヲ得ベシ

十年以下伊國内ニ住所ヲ有スル外國人ノ子ハ之ヲ外國人トス但シ第六條ノ規定ヲ適用ス

二、如何ナル度合迄市民タル權利ヲ土人種又ハ固有人種

ニ無ヘ居ルヤ

前問ニ対シテ説明シタルカ如ク伊國封建時代ニ於テハ伊國土人種ノ中ニ數多ノ階級アリテ法律上些少ノ權利ヲモ有セサル無籍者タルモノアリタリシカ一千八百四十八年憲法發布ト共ニ凡テ伊國人ハ法律上同等ナルニ至リ皆市民タルノ權利ヲ有スルニ至リ則チ語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ土人種又ハ固有人種ハ無制限ニ且ツ無度合ニ皆一樣ニ市民タル可キ權利ヲ有スルナリ

三、殖民地市民ナル制アリヤ仮令ハ茲ニ人アリ一ノ殖民地ニ於テハ市民權ヲ有スルモ其父母(則チ殖民地ノ本管官内)又ハ本管内ノ他ノ殖民地ニ於テハ其權ヲ有スルヿヲ得サルコトアリヤ

伊國ニ於テハ殖民地市民ナル制ナシ則殖民地ニ於テナリトモ本國ニ於テナリトモ凡ソ伊國人ナル分限ヲ有スルモノハ皆法律ニ對シ同等ノ權利ヲ有ス蓋シ伊國ノ殖民地ナルモノハ「マツサウア」一個處アルノミ而シテ其發達極メテ尚ホ不完全ナルカ故ニ何等特別ノ制度ナシ唯一時假定ノ行政規則五六アルノミ從ツテ殖民地市民ノ制度ホモ存在セズ

五、歸化ニ付

一、歸化ノ法制如何

伊國ニ於テハ特別ニ歸化法ナルモノナシ唯タ千八百六十五年六月二十五日發布ノ現行民法第十條ニ於テ「伊國人民タル分限ハ前條規定ノ外立法ニ依レル歸化及ト勅令ニ依レル帰化ノ二方法ニ依ッテモ之ヲ取得ス勅令ニ依レル帰化ハ帰化スヘキ外國人ノ住所若シクハ住所トナサントスル土地ノ身分取扱吏ノ訴勅令ヲ登録シ且ツ右取扱吏ノ面前ニ於テ皇帝ニ忠實ニシテ憲法及法律ヲ遵守スヘキ旨ヲ宣誓シタル後ニア

ラサレハ効力ヲ生セサルモノトス

談登録ハ帰化ノ勅令發布後遅クトモ六ヶ月以内ニ之ヲ為スヲ要ス、帰化伊國人ノ妻及未成年ノ子ハ伊國内ニ居所ヲ定メタルニ於テハ同時ニ伊國人タル分限ヲ取得ス但シ右ノ子ハ本法第五條ノ手続ニ依リ（註、成年ニ達シタル後其住所地ノ身分取扱吏ノ面前外國ニアルトキハ伊國ノ外交官又ハ領事官ノ面前ニ於テ宣言スルヲ指ス）宣言ヲ為スニ於テハ外國人タル分限ヲ撰擇スルヲ得」ト規定シアリ且ツ右ノ外千八百八十一年三月廿一日付内務省々令ニ於テ「外國人ニシテ帰化ノ請

願ヲ為スニハ（第二）出願人ノ出産証書（第二）原籍國ニ於ケル無罪証状（第三）現住地々方官廳ノ下付セル家族形状書（第四）伊國司法省所藏ノ外國人原簿抜萃（第五）出願人伊國内ニ出生シタル場合ニ於テハ服役証書ヲ内務省ニ提出スルコトヲ要ストアルノミニシテ其他何等ノ取極メタモノアルヿナシ

前掲民法第十條ニ於テ立法ニ依レル帰化トハ各場合毎ニ内務大臣ニ提出シ帰化出願人ニ全ク伊國人ト同様ノ公権私権ヲ賦與スルノ件ヲ上下両院ニテ許可シ皇帝ノ裁可ヲ得テ發布スルモノニシテ伊國法

學者ノ大歸化ト稱スルモノ則是レナリ是レハ政治學術其他伊國ニ大功勞アル外國人ニシテ全ク伊國人ト同樣ナル權利ヲ得ンコトヲ出願スル場合ニ立法的作用ヲ以テ許與スル處ノ歸化ニシテ其最モ著名ナル例ハ西牙利國愛國者ゴッスート、同國陸軍中將ドリケー、佛國人ニシテ當外務書記官タルマイヨル、瓊國人カンターニ、等ノ大歸化ニシテ何レモ當時人口ニ膾炙シタリシ事件ナリ（該件ニ關スル法案及委員會ノ報告為參考別紙二歸トシテ添付ス）

小歸化ト前掲第十條ニ勅令ニ依レル歸化ト稱スルモノニシテ成年ノ外國人カ前出一千八百八十一年三月廿一日内務省令ノ規定ニ依リ内務省ニ出願シ内務省ハ能ク万般ノ事情ヲ斟酌シ皇帝ノ裁可ヲ得勅令ノ形式ヲ以テ之ヲ發布スルモノナリ、歸化ノ事項ニ關シ伊國法制ノ諸外國法制ト全ク異ナル点ハ小歸化ヲ以テ全ク行政的事項トナシ内務大臣ノ責任ヲ以テ之ヲ決シ毫モ法律及立法部ノ拘束ヲ受ケサル点ニアリ是レ注意ヲ要スル處ナリ外國人ニシテ小歸化ヲ得タルモノハ伊國人ノ分限ヲ有スト雖公權私權ノ両者ニ於テ全ク伊國人ト同等ナルニ非ス政權

（衆議院議員被撰権、同撰挙権）ハ全ク之ヲ享有スルヿヲ得ズ行政上ノ撰挙権（市會議員被撰権、及撰挙権）ハ之ヲ有シ領事官（外交官トナルノ権利ハ之ヲ有セス）司法官陪審官代訴人公証人等トナルノ権利ヲ有ス且ツ右ノ外純粋ノ私権ヲ有スルハ固ヨリ言フ迄モナシ而シテ小帰化ノ効果ニ就テハ特別ノ法令存セス撰挙法其他前掲諸事項ニ関スル諸法律中ヨリ推考シ又諸判決例中ヨリ原則ヲ見出シ得ベキノミ

又一千八百七十四年九月十三日ノ法律ニ於テハ帰化ヲ以テ

政府ノ諸免許（コンセッション）ト同一視シ各帰化人ヨリ伊貨貳百四拾利ヲ徴収スルコトヲ規定セリ

二、如何ナル人ニシテ帰化スルコトヲ得ベキヤ

前項説明シ来リタル如ク伊國ニ於テハ帰化請願人ニ対シテ特種ノ条件ヲ要求スルコトナキカ故ニ如何ナル外國人タリトモ其本國ノ法律ニ於テ成年ニ達シタルモノハ（此事モ前掲法條ニ明文ナシ然レトモ未成年者タル外國人カ帰化ノ願ヲ提出スルヲ得ストハ議論一定スル處ナリ）帰化ノ願ヲ伊内務大臣ニ提出スルヿヲ得ベシ但シ之ヲ許可スルト否トハ全ク政府ノ権限ニ

屬ス

三、各種ノ權利ニ關シテ本生ノ者ト歸化人トノ間ニ何等ノ區別ヲ為スヤ

已ニ縷陳セル如ク大歸化ハ全ク伊國人ト同等ノ權利ヲ得小歸化ハ純粹ナル政權ハ之ヲ得サレドモ其他ノ權利ハ之ヲ有スルヲ原則トス、詳細ハ前項ニ就テ之ヲ看ルヘシ

四、殖民地ニ歸化スルノ制アリヤ若シアリトセハ如何ナル度合迄其父國又ハ他ノ殖民地ニ於テ權利ヲ附與セラルヘキヤ

伊國ニ於テハ殖民地ニアル外國人メリトモ伊太利本國ニ在ル場合同樣内務省ニ歸化ノ願ヲ提出スル時ハ内務省ハ一方般ノ事情ヲ斟酌シ右ノ請願ヲ許可スヘキヤ否ヤヲ定ムルモノトス右ニ就テハ別ニ法律上直接ノ明文ヲ發見セスト雖モ一千八百九十年七月一日ノ法律ニ於テ反対ノ法條ナキ限リハ殖民地ニ於テモ伊國法律ヲ適用スト云フ明文アルト（別紙第三号參考書類）伊國外務省殖民局ニ於テ從來常ニ右ニ説明セル如キ處置ヲ執リ來リタルトニ依リテ殖民地ニアル外國人ハ歸化ノ事柄ニ關シ伊本國ニ在ル外國人ト同等ニ取扱ハルヽヲ知

ルベシ

反対ノ法條ナキ限リハ伊國殖民地ハ伊本國ト同樣ニ看做サルヽモノナルカ故ニ伊本國ニ在テ帰化スルモ伊殖民地ニ在テ帰化スルモ其取得スル權利ニ於テ少シモ異ナルコトナシ故ニ殖民地ニ於テナリトモ大帰化ヲ得レハ全ク伊國人ト同樣ノ公權私權ヲ得小帰化ヲ得レハ純粋ナル政權ノ外ハ皆之ヲ享有スルコトヲ得ヘキ事前掲第一問ノ場合ト同樣ナリ

六、脱籍ニ付

一、如何ナル者ヲ脱籍者トナスヤ

本問ニ關シテハ民法第十一条第十二條及第十四條第一項ニ明文アリ左ニ之ヲ譯出ス

第十一條

臣民タル分限ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ失フ

第一

住所地ノ身分取扱吏ノ面前ニ於テ伊國人タル分限ヲ抛棄スル旨ヲ宣言シ且ツ其住所ヲ外國ニ移シタル場合

第二
外國人タル分限ヲ取得シタル場合
第三
伊國政府ノ許可ナクシテ外國政府ノ官職ヲ受ケ
又ハ外國軍役ニ入リタル場合
伊國人タル分限ヲ失ヒタル者ノ妻及ビ未成年ノ子ハ
同時ニ伊國人タル分限ヲ失フ但右妻若シクハ子カ
住所ヲ伊國内ニ保存スル場合ハ此限リニ非ラス
前項妻ハ第十四條ノ規定ニ依リ（夫ノ死シタル後伊
國ニ帰リ伊國内ニ住所ヲ定ムルヲ指ス）子ハ第六

條ノ規定ニ依リテ（成年ニ達シタル後伊國内ニ住所
ヲ定ムルヲ）伊國人タル分限ヲ回復スルヲ得ヘシ
第十二條
前條ノ規定ニ依リ伊國人タル分限ヲ失ヒタルノ故ヲ以
テ兵役並ニ國家ニ対スル叛逆罪ノ結果ヲ免ルヽヲ
得ス
第十四條
伊國人タル女子ニシテ外國人ト婚姻シ其婚姻ニ依リ
外國人タル分限ヲ取得シタル場合ニハ伊太利人タル
分限ヲ失フモノトス

右ニ譯出セル第十一條第一項ハ伊國立法者ノ國民性
藉ニ関シ極メテ自由ノ主義ヲ執リタル結果ニシテ伊
國人タルノ分限ヲ有スルハ権利ニシテ義務ニ非ラスト
ノ思想ニ基キタルモノナリ然レトモ從來ノ實例ニ徵ス
ルニ右第一項ノ規定ヲ利用シタル伊國人ハ極メテ少ク
之レニ反シテ伊國ニ復帰スルノ意思ナクシテ外國ニ
移住シ數十年ノ星霜ヲ経ルモ常ニ伊國人タル分限
ヲ保有セントスルハ伊國人ノ特性ナルカ如シ現ニ南米ブ
ラジル國ニ移住セル伊國人ノ數ハ殆ント一百万以上ニシ
テ數十年以來同國ニ居住スルモノ尠ナカラサレトモ皆伊

國人タル分限ヲ保有スルカ故ニ同國在留伊國外交官
及領事官等ノ面倒極メテ多ク從ツテ近來當國政
治家間ニ伊國ニ復帰スルノ意思ナクシテ外國ニ移
住シ或ル一定ノ歳月ヲ経過シタルモノハ伊國人タル
分限ヲ失フヿトナスノ必要ヲ唱フルモノ輩出スルニ至
レリ右ノ提議ハ遂ニ伊國ノ成法トナルヿ蓋シ遠キニ非
サルヘシ

二、如何ナル場合ニ於テ原國籍ニ復帰スルヤ
本問ニ關シテハ伊民法第十三條及第十四條第二項ニ
明文アリ

左ニ之ヲ譯出ス

第十三條

前條ニ規定セル理由ノアルモノニ依リ伊國人タル分限ヲ失ヒタルモノハ左ニ掲クル三條件ヲ同時ニ充スニ於テハ伊國人タル分限ヲ回復スルモノトス

第一

政府特別ノ許可ヲ受ケテ伊國内ニ再帰スル丁

第二

外國人タル分限ヲ抛棄シ又ハ外國ノ官職若クハ軍役ヲ去ル丁

第三

伊國内ノ身分取扱吏ノ面前ニ於テ自己ノ住所ヲ伊國内ニ定ムルコトヲ宣言シ且ツ右宣言ノ時ヨリ一ヶ年以内ニ於テ實際伊國内ニ住所ヲ定ムルコト

第十四條第二項

外國人ニ婚姻セル伊國女子カ寡婦トナリタル後伊國ニ居住シ又ハ帰来シ身分取扱吏ノ面前ニ於テ伊國内ニ住所ヲ定メントスル意思ヲ發表シタル場合ニ於テハ伊國人タル分限ヲ回復ス

右ノ外第一問ニ於テ譯出セル第十一條第三項モ亦原國

籍回復ノ一場合ト見做スヘキモノタルヤ別ニ説明ヲ要セス

七、司法上ノ取扱ニ付

一、訴訟事項ニ付外國人ハ内國人ト同樣ノ權利ヲ有スルヤ

訴訟事項ニ付伊國ニ於ケル外國人ハ原告タル場合ト被告タル場合トヲ問ハス伊國人ト同樣ノ權利ヲ有シ或ル他諸國ニ於ケルカ如ク原告タル場合ニ裁判上ノ保証金(Cautione judicatum solvi)ヲ寄托スルカ如キ義務ナク伊國人同樣ノ手續ヲ以テ一方般ノ訴訟事項ニ關係スルヲ得ヘシ此事ニ付テハ民事訴訟法ニ於テモ又刑事訴訟法ニ於テモ何等ノ明文ナシト雖民法

第三條ニ於テ極メテ概括的規定ヲ設ケ内外人全ク
同等ノ私權ヲ享有スル旨ヲ明カニシタル以上ハ外國
人ハ訴訟事項ニ於テモ伊國人同樣ノ權利ヲ有スル
コト當然ナリトノ議論學者間ニ一致シ諸裁判例
モ亦皆之ニ違フナシ（諸外國ノ法律中外國人ニ対シ
裁判上ノ保証金ヲ要求スルモノト雖商事ニ関シテ
ハ之ヲ要求セス故ニ制法家ハ獨リ民事ニ関シテノミ
外國人ニ対シ裁判上ノ保証金ヲ要求スルノ不當ナル
ヲ論シ遂ニ現今ノ如キ内外人同等主義ヲ取リタル
ナリ）

二、逮捕又ハ保証金ニ付内國人ト外國人トノ間ニ何等ノ
區別ヲナスヤ
外國人ハ逮捕ニ関シ伊國ニ於テ全ク内國人同樣ノ待
遇ヲ受ク又保証金ニ関シテモ全ク内國人同樣ノ取
扱ヲナス此事ニ就テモ又法令ニ積極的明文ナシ是
レ民法第三條ノ結果ナリ
三、裁判所ハ通譯官吏ヲ備置クヘキ義務アルヤ
無シ、原告又ハ被告中全ク言語不通ノモノアル時ハ裁
判所ハ各場合ニ應シテ臨機ノ處分ヲ為スヘシ原告
又ハ被告ヲシテ其十分信用スル通譯人ヲ提供セシムル

カ又ハ裁判所ニ於テ自ラ適當ノ通譯人ヲ撰ヒ訴訟人ヲシテ其費用ヲ負担セシムル等ノ便宜的處分ヲ為ス

八、不動産ノ所有ニ就キ

一、内國人ト外國人トノ間ニ何等ノ差別アリヤ

伊國ニ於テハ不動産ノ所有ニ付内外國人間何等ノ區別タニ存スルヿナク外國人モ全ク伊國人同様伊國法律ニ從ヒ不動産ヲ取得賣買讓與相續スルヲ得ベシ之レニ付テハ別ニ積極的ノ明文ナシト雖モ民法第三條ニ於テ外國人ハ内國人同様ニテノ私權ヲ享有スト規定シタリ不動産所有賣買ハノ私權ノ行使ナルコト何人モ之ヲ疑フモノナク且ツ之ニ關シテ何等反対ノ法文ナキヨリシテ外國人ハ内國人

同様不動産所有権ヲ有スト雖ノ結論ヲ生スルモノニシテ
是レ民法編纂関係書類ニ依ルモ明カナル所且ツ
学説判決例共ニ此点ニ就テ一致セリ

二、外國人ハ鑛山又ハ鑛區ヲ所有スルヿヲ得ヘキヤ

鑛山又ハ鑛區ノ所有権ニ關シテモ亦外國人ハ内國人
ト全ク同等ノ権利ヲ有シ之ニ関シテハ十八百五十九年
十一月二十日發布ノ鑛業法第三十八條ニ於テ内外人ヲ
論セス法定ノ條件ヲ充スニ於テハ鑛業免許ヲ受ク
ルヲ得ヘキ旨ヲ明定セリ(別冊第四号)尤モ該法律ハ
伊國一統前ニ制定セラレタルモノニシテ伊國全体ニ於テ

効力ヲ有スルモノニ非サレハ其効力ヲ有セサル地方ニ於テ
ハ外國人ハ民法第三條ノ効果ニ依リ内國人同様鑛
山鑛區所有権ヲ有スルコト学説判決例共ニ一致セリ

九、動産ノ所有ニ付

一、外國人ハ內國人同樣各種ノ動產ヲ取得占有スルヿヲ得ヘキヤ

各種ノ動產ヲ取得占有スルヿニ關シ外國人ハ內國人ト同等ノ權利ヲ有スヿニ關シテモ亦明文ナシト雖民法第三條ノ明文ノ結果ニ依リ外國人ハ右ニ述ヘタル權利ヲ有スヿ但シ船舶ニ關シテハ一ノ例外アリ第三問ニ於テヿヲ詳說スヘシ

二、國債券又ハ地方債券ヲ所有スル權利ヲ內國人ニノミ限ルコトアリヤ

外國人ト雖ドモ其伊國内ニ住所又ハ居所ヲ有スルト否トヲ論セス全ク内國人同樣伊國債券及ヒ地方債券ヲ所有スルヲ得ベシ此事ニ關シテハ法律勅令ニ積極的明文ナシ民法第三條原則ノ結果ナリ

三、外國人ハ船舶ヲ処有シ又ハ船舶ノ株主タルヿヲ得ヘキヤ若シ株主タルヿヲ得ルトセハ内外國人ノ間ニ於テ如何ナル比例ニテ之ヲ得ベキヤ

一千八百六十五年六月廿五日發布伊國海商法第四十條ニ於テハ「凡ソ船舶ニシテ伊國々籍ヲ得ル為メニハ其所有權カ全ク伊國臣民ニ屬スルカ又ハ少ナクトモ五年以

上伊國内ニ住所ヲ有スル外國人ニ屬スルヲ要ス但シ伊國内ニ住所若クハ居所ヲ有セサル外國人ト雖ドモ伊國船舶所有權三分ノ一迄ハ之ヲ有スルヿヲ得」ト規定シ頗ル外國人ノ動産所有ノ權利ヲ制限シタリシカ一千八百七十七年五月二十四日發布ノ改正海商法第四十條ニ於テハ「船舶ニシテ伊國々籍ヲ得ルカ為メニハ其所有權カ伊國臣民ニ專屬スルカ又ハ伊國内ニ五年以上住所又ハ居所ヲ有スル外國人ニ屬スルヲ要ス但シ伊國内ニ住所若クハ居所ヲ有セサル外國人ト雖ドモ船舶所有權ノ三分ノ一マテハ之ヲ有スルヿヲ得」ト

規定シタリ而シテ居所ノ一ヲ有スル外國人ニ船舶ノ處有權ヲ許シタルハ一ハ外國人ノ伊國ニ於テ航海業ヲ營ムヲ奬勵セントシタルト一ハ居所ナルモノハ人ノ日常居ル所ニシテ業務及ヒ利益ノ中心タル住所ナルモノヨリモ却ッテ識別シ易キ所アルヿニ基キタルコト當時ノ說明書類ニ依ッテ明カナリ

前掲法文ニ於テハ所有權云々トノミ記載シタルニ外國人カ株式ノ方法ヲ以テ三分ノ一以下ノ所有權ヲ有スルヲ得ヘキハ固ヨリ論ヲ俟タス

四、外國人ハ銀行、鐵道、船渠、造船所、又ハ鑛山ノ株主

トナルコトヲ得ヘキヤノ若シ然レハ如何ナル度合迄ナルヤ

外國人ハ全ク伊國人同樣本問所掲ノモノ、株主タルヿヲ得ベシ法令ニ明文ナシ民法第三条原則ノ結果ナリ

五、外國人ハ無制限ニ內國人同樣政府ヨリ補助金ヲ仰キ又ハ政府ノ特別ナル保護ヲ受クル各種會社ノ株主トナリヿヲ得可キヤ

然リ、此事ニ關シテモ法令ニ明文ナシト雖ドモ民法第三條ノ原則ノ結果トシテ實行スル處ナリ

六、外國會社（特別ノ法律ニ依テ組織セラルヽモノ例ヘハ我日本銀行上金銀行ノ類）及株式會社ニ付

一、外國會社及株式會社（殊ニ銀行抵當公債金保險船舶業ノ）ハ何等條件ヲ付セラレ又ハ何等條件ヲモ付セラレスシテ其業務ヲ行フヿヲ許サレ居ルヤ

外國高事會社ニ關シテハ商法第二百三十條乃至第二百三十二條ニ左ニ譯出スル規定アルニ依リ外國諸高事會社ハ右ノ規定ニ依ルニ於テハ伊國内ニ於テ自由ニ其業務ヲ營ムヿヲ得ルヿ固ヨリ多言ヲ要セスシテ其商法普通ノ規定ニ依リテ組織セラレタルト持

別ノ法律ニ依リテ組織セラレタルト又ハ其合名及合資タルト株式タルトハ其問フ所ニ非サレハ外國民事會社カ伊國内ニ於テ自由ニ其業務ヲ行フヿヲ得ルヤ否ヤニ付テハ伊國民法其他ノ法律中特殊ノ明文ナキカ故ニ學説及判決例未タ全ク一致セサルモノヽ如シ一派學者ノ説ニ依レハ民事會社ナルモノハ一種ノ法人ニシテ法人ハ各國カ各其必要又ハ有用ト認ムル所ニ從ヒ法律ノ假想ヲ以テ之ニ人格ヲ賦與スルモノナレハ其人格タルヤ國外ニ於テ毫モ効力ヲ生スルモノニ非ス從ッテ外國民事會社ハ伊國法律ノ明許ナキ以上ハ伊

國内ニ於テ其業務ヲ行フヿヲ能ハサルヲ知ルヘシ云々ト主張スレトモ他派學者ノ説ニ依レハ伊國民法第三條ニ「外國人ハ伊國人ト同樣ニ私權ヲ享有ス」トアリ而シテ右外國人トハカ論外國法人ヲモ含ムヿ現行民法編纂完成ノ諸書類ニ徴スルモ明瞭ナルカ故ニ法人タル外國會社ハ伊國内ニ於テ自由ニ其業務ヲ行フヿヲ得ベシ云々ト説明セリ而シテ當時伊國ノ學説及判決例共ニ第二説ニ傾ケリ

伊國法制ニ依レハ「人」ノ身分及ヒ能力ハ其本國法ニ遵フヿヲ以テ原則トナシ（伊民法第六條參看）法人タル

外國會社ハ之ヲ外國人ト看做スカ故ニ右外國會社ノ能力其本國ノ法律ニ依テ之ヲ判斯スヘキモノニシテ伊國法律ニ依ルヘキモノニ非サレハ其中公共ノ秩序及善良ノ風俗ニ關スル規定ニ關シテハ偏ヘニ伊國法律ニノミ依ルヘキモノナルニ付（伊民法第十二條）例ヘハ宗教ニ關スル法人ハ伊國内ニ於テ財産ヲ有スルヲ得スト云フ規定ノ如キ及ヒ民事上ノ法人カ不動産ヲ取得スルニハ勅令ヲ要スルカ如キ又ハ民事上ノ法人カ受クヘキ所ノ相続ハ政府ノ許可ヲ受クルニ非サレハ右法人ニ於テ之ヲ受クル能ハスト云フカ如キ規定ハ

亦公共ノ秩序ヲ維持スルカ為メ伊國ニ於テ特設シタル法制ナルニ依リ外國會社ハ仮令ヒ其本國法ニ於テ此等ノ事項ニ対スル能力ヲ有スト雖伊國ニ於テハ断シテ不能力ト看做サル可キナリ

外國會社ニ關スル伊國商法ノ規定（十八百八十二年十月発布）

第二百三十條

外國ニ於テ合法ニ組織セラレタル會社ニシテ伊國内ニ支社又ハ代表所ヲ設ケントスルモノハ登記、定款及會社契約ノ公示、右ニ変更アリタル時ハ其変更ノ事由及歳出入會計簿等ニ關スル伊國商法ノ規定

ヲ遵守スヘシ且ツ右支社又ハ代表所ノ業務ヲ担当シ若シハ右本社ヲ代表スルモノハ氏名ヲ廣告スルヿヲ要ス

右業務担当人若シハ代表者ハ第三者ニ対シテ伊國会社ノ業務担当人ニ等シキ責任ヲ有ス

外國會社ノ性質ハ第七十六條ニ規定シタル諸會社（合名、合資、及株式ヲ指ス）ノ性質ト異ナル件ハ定款及會社契約ノ公示等ニ関シ本法律カ株式會社ニ対シテ規定シタルノ手続ト同様ナル手続ヲ履行スルヲ要シ而シテ右會社ノ業務担当人ハ第三者

ニ対シテ伊國株式會社担当人カ第三者ニ対シテ有スル責任ト同様ナル責任ヲ有ス

外國ニ於テ組織セラレタル會社ニシテ其本店若シハ最モ主要ナル目的物件ヲ伊國内ニ有スル件ハ其會社契約ノ形式及効力ニ関シ（仮令ヒ右契約カ外國ニ於テ取結ハレタルニモセヨ）全ク本法律ノ規定ヲ適用ス

第二百三十一條

前条規定ノ手続ヲ履行スル件ハ外國會社ハ伊國会社ト同様ナル法律上ノ結果ヲ得而シテ総テノ場合ニ於テ右外國會社ノ業務担当人及ヒ代表者ハ其資

格ニ属スル事件ノ取扱ヨリ生シタル義務ニ関シ連
帯且ツ單独ニ責任ヲ帯フルモノトス

第二百三十二條

外國ニ於テ組織セラレタル合名及合資會社ハ第九十
條ニ規定シタル期限内ニ（註、會社契約ノ日付後十五日
以内）其重ナル事務所ヲ設ケントスル土地ヲ管轄スル
商事裁判所書記局ニ其會社契約ノ全部ヲ提供
スルヿヲ要ス

伊國内ニ於ケル其他ノ支店若クハ代表所ニ關シテハ
第九十條ノ規定（註、右支店若クハ代表所ト關係ヲ

ヲ定メタル契約書ヲ提供スルヿト等ノ手續ヲ指ス）ヲ遵
守スルヿヲ要ス

右ノ外ノ種類ニ属スル會社ニシテ外國ニ於テ組織セラ
レタルモノハ其主ナル事務所ヲ設ケントスル土地ニ於テ
ハ第九十一條ノ規定ニ從ヒ其他ノ支店若クハ代表所
ヲ設ケントスル土地ニ於テハ第九十二條ノ規定ヲ遵守
スルヲ要ス

二、若シ條件アリトセハ如何ナル條件アリヤ

商事會社ハ前問ニ説明セル商法上ノ手續ヲ為
スヘキヿ固ヨリ論ナシ民事會社ニ就テハ特別ノ明

文ナレト畢ニ商事會社ノ例ニ依リ公告登記等ノ手續ヲナスヘキヿニ定マレリ

三、外國會社又ハ株式會社ノ業務ヲ行フヿヲ得ル權利ハ条約ニ依テ之ヲ定ムルヤ

伊國ト他諸國ト締結セル通商航海条約ニ於テハ別ニ一条ヲ設ケ一方ノ國ノ商工業ニ關スル會社他ノ一方ノ國ニ於テ法律ニ從ヒ其權利ヲ行フヿヲ得ル旨ヲ規定セルモノ少ナカラサルカ故ニ前掲商法発布以前ニアリテハ外國會社ハ國際條約ノ允許アリテ始メテ伊國内ニアリテ其ノ權利ヲ行使スルヿヲ得ルモ

ノナリ然ラスンハ多數ノ國際條約ニ於テ右ノ如キ規定ヲ設クルノ必要少シモ之レナキ筈ナリトノ議論行ハレタリシカ現行商法ニ於テ前項説明セル如キ明文ヲ設ケタル後ハ此種ノ議論全ク絶止スルニ至リタリ則チ外國諸會社ノ伊國ニ於テ其業務ヲ行フノ權利ハ條約ニ於テ之ヲ規定セルニ非スシテ内國法ヲ以テ之ヲ明揭スルナリ

四、内國富籤ト外國富籤トノ間ニ何等ノ差別ヲナスヤ

伊國立法ノ原則ハ内國富籤ト雖モ全ク之ヲ禁スルニアリテ已ムヲ得サルノ場合ニ於テノミ之ヲ許スノ主

義ナリ一千八百六十三年九月二十七日發布ノ法律ハ
富籤ヲ全禁スト雖ノ明文ヲ設ケ政府營業ノ富札
賣下ハ假ニ之ヲ保存スト規定セリ(政府營業ノ富
札賣下ハ遥ク伊國統一以前ヨリ半島諸小國ニ於
テ盛ニ行ハレタルモノニシテ國庫収入ノ一部トナリ
タルモノナリ伊國統一ノ政治家ハ富札ヲ以テ人民ノ
僥倖心ヲ發達セシムルモノトナシ之ヲ禁セントスル
ノ意思ヲ抱キタルモノ多カリシモ右禁止ノ為メニ
國庫収入ヲ著シク減少スルヲ恐レ本文ノ如ク假ニ保
存ストノ明文ヲ設ケタルナリ然レトモ右假ヲ文字ハ全

ク有名無實ニシテ今ニ至ル迄政府賣下ノ富札盛ン
ニ発行セラル是レ當國政治家ノ意見ニ依レハ富札
賣下ハ一種簡便ナル徴税法ニシテ人民ノ僥倖心
ヲ發達セシムルノ害ハアレトモ人民ノ最モ喜ヒテ買
受クル處ノモノタルカ故ニ政府ニ於テ少シモ力ヲ労ス
ルヿナクシテ國庫ノ収入ヲ得ルノ便法タリ(現時富札
賣下ヨリ生スル國庫ノ収入ハ一ヶ年大凡八百萬利
ナリト云フ)從ヒテ何党ノ内閣モ皆之カ廃止ヲ断行
スルヿ能ハス將来ト雖モ永ク保存セラルヘシトノ事ナ
リ)其後一千八百八十二年十二月廿一日発布ノ法律ヲ以テ合法

ニ成立スル処ノ無形人カ慈善及美術奨励ノ目的ノ
為メニ富札ヲ発行セントスル件ハアル條件ノ下ニ於
テ之ヲ許可スル旨ヲ規定シ是ニ於テ始メテ伊國
ニ於テ政府営業ノ富札ノ外ニ別種ノ富札ノ行
ハルヽニ至リタルナリ然ルニ同法律第四條ニ於テ
ハ伊國内ニ外國富籤ノ賣買及分配等ヲ禁スル
ノ明文ヲ設ケ外國富籤ハ伊國内ニ於テ取引ス
ルヲ能ハサルヲニ確定シ現時尚ホ之ニ準ノ前文第
四條ノ明文左ノ如シ

Il prohibita nel Regno la vendita o la di-

stribuzione di biglietti di lotterie aperte all'estero,
o di titoli di concessioni che si promettono rimborso di capitali
o pagamenti di interessi o premi, anche
la vendita di lotterie per pubblica sottoscrizione
e proibita impreslit.

六、商業ニ付

一、商業ニ關シ内國人ト外國人トノ間ニ何等ノ差別
ヲナスヤ

二、外國人ハ何等特別ナル許可ヲ要スルヤ

三、商業ニ從事スル外國人ハ住所ヲ受ムルヲ必要トスルヤ

四、右等外國人ニ対シテ或種ノ品ヲ賣買スルコトヲ特禁シ居ルヿナキヤ

商業ニ関シテハ伊國ニ於テ全ク内外人ヲ同一視シ（民法第三條原則ノ結果ニシテ法令ニハ直接積極的明文ナシ）外國人ハ其住所又ハ居所ヲ伊國内ニ有スルト否トニ不拘何等ノ特別ナル許可ヲ受クルヿナクシテ伊國法律ニ從ヒ商業ニ從事スルヲ得ベシ又外國人ニ對シテ或種ノ品ヲ賣買スルコトヲ特禁シ居ルヿナク全ク内外人ヲ同一視セリ（政府專賣品例ヘハ塩ノ如キハ内外人共ニ賣ルヲ不得）

十二、沿海貿易及殖民地間又ハ殖民地ト本國間貿易ニ付

一、外國人又ハ外國船舶ハ沿海貿易ニモ亦殖民地間又ハ殖民地ト本國間貿易ニモ從事スルヿヲ得カル

二、若シ全然從事スルヿヲ得カルニ非ラストセハ如何ナル制限アルヤ

伊國ニ於テハ或ル國々（例ヘハ墺國）トノ條約ニ依リ沿海貿易ニ關シ其國民ヲ伊國人ト同一ニ取扱フヿヲ故ニ最惠國條款ヲ含メル條約ヲ伊國ト締結シ

テ實行スル處ノ他諸國ノ人民ハ右最惠國條款ノ作用ニ依リ伊國人同樣沿海貿易ニ從事スルヲ得ベシ但シ沿海貿易ニ關シ條約ニ於テ特別ノ留保ヲナシアル場合ハ此限リニアラズ而シテ伊國ト何等條約ヲ有セサル邦國ノ人民カ伊國ニ於テ沿海貿易ノ權ヲ有セサルハ固ヨリナリ伊國ニハ唯一個ノ殖民地アルノミナルカ故ニ殖民地間ノ外人貿易問題ハ發生シタルヿナシ

外國人又ハ外國船舶ハ伊國ノ法令ニ服從シ自由ニ殖民地ト伊本國間貿易ニ從事スルヿヲ得ベシ右ニ付テハ法令ニ明條ナシ民法第三條原則ノ結果ナリ

圭 漁業ニ付

一、外國人又ハ外國船舶ハ漁業ニ從事スルヿヲ得サルヤ

伊國ト諸國トノ國際條約ニ於テ漁業ニ關シ伊國人ト同樣ノ權利ヲ有スル旨ヲ規定セル邦國ノ人民亦ハ船舶ハ全ク伊國人ト同樣法律ノ規定ニ據リ漁業ニ從事スルヿヲ得ルハ固ヨリ論ヲ俟タス漁業ニ付條約上何等ノ規定ヲ有セサル邦國ノ人民又ハ船舶ハ勅令ニ依テ定ムル所ノ一定ノ金額ヲ納ムルニ於テハ伊國人ト同樣漁業ニ從事スルヿヲ得ベシ（伊國海商

法百四十三條）但シ右一定ノ金額ヲ納ムト雖六ヶ月以上継続シテ漁業ニ従事スルヿヲ得ス（海商法施行細則第七百三十條乃至第七百三十四條）

二、若シ全然従事スルコトヲ得サルニ非ストセハ如何ナル制限アルヤ

前問ニ於テ已ニ説明セリ

商、職業ニ付

一、外國人ハ官吏又ハ公吏タルコトヲ得ヘキヤ

伊國ニ於テ外國人ノ享有スル權利ハ私權之レノミ（伊民法第三條）公權則政權及行政權ノ如キハ一切之ヲ伊國人ニ專屬セシムルカ故ニ外國人ハ官吏若シクハ公吏タルヿヲ得サルモノトス之ニ付テハ別ニ概括的ノ法文ナシト雖民法第三條ヲ反対ニ解釈スルノ結果又一千八百六十三年十二月六日發布司法制度法一千八百六十六年一月二十八日發布領事官制法等ニ於テ司法官及領事官タルノ權利ヲ伊國人ニ

專屬セシムル明文アル等ヨリ演繹スルヲ得ヘク又
實際ニ於テモ諸省ノ官吏ハ勿論市町村ノ公吏ヲ始
メトシ陪審官公証人等ハ伊國人ニ限ルヿト定マリ
居レリ
唯タ一見例外ノ如クナルハ大學ヲ始メ公立諸學校ノ
教師職ハ政府ヨリ俸給ヲ受クルモノナレ𪜈法律ノ条
件(競争試驗又第等)ヲ具フルニ於テハ外國人ナ
リトモ之ニ当ルヲ得ベキ(一千八百五十九年十二月十三日
發布公共教育法第百六十六條)ノ一事是レナリ然
レ𪜈教師職ハ國家ノ政權ニ參與スル処ノ官吏若リ

ハ公吏トナル能ハストト云フ原則ヲ傷フモノニ非サルナリ
二、如何ナル職業ハ内國人ニ限ルヤ
伊國ニ於ケル外國人ハ伊國人ト同様如何ナル職業
ニモ從事スルヲ得ベシ是レ職業ハ元來私權ノ行
使ニシテ民法第三條原則ノ結果トシテ外國人ハ
内國人同様ノ私權ヲ享有スルニ依ルナリ唯タ公
証人ノ職ハ伊國人タル分限ヲ有スルニ非ラサレハ之
ヲ行フヿ能ハス(千八百七十九年三月廿五日公証人規
則第二十五條)又辯護士職ニ付テモ一千八百七
十四年六月八日付法律第三十九條ニ於テハ伊國人タ

ル分限ヲ必要トセシカ現行法律ニ於テハ右ノ條件ヲ
廢止シ唯伊國法科大學卒業証書ヲ有スル數
又ハ外國大學卒業証書ニシテ伊國大學ニ於テ
兼諾シタルモノヲ有スルヿヲ必要トシタリ
三、外國人ハ總テノ場合ニ於テ會社及株式會社ノ役員
及重役タルヲ得ヘキヤ
四、若シ得サルヿトスレハ如何ナル取除ケアリヤ
伊國ニ於テ外國人ハ會社及株式會社ノ役員及重
役タルヲ得ルコト全ク伊國人ト同樣ナルヲ原則トス但シ
鉄道會社及政府ノ補助金ヲ受クル銀行ハ單ニ伊國

人ノミヨリ成立スル事務員會ヲ有スルヿヲ要ス
Consell d' administration
五、外國人ハ凡テノ場合ニ於テ遺言管財人選定管
財人後見人保佐人被信托人タルヲ得ヘキヤ
六、若シ得サルコトトセハ如何ナル取除ケアリヤ
第五問ニ陳列セル諸種ノ職務ハ伊國ニ於テ全ク之
ヲ私權ノ行使ト看做シ外國人モ伊國人同樣總テ
ノ場合ニ於テ此等ノ職務ニ當ルコトヲ得ベシ尤モ後
見人ノ場合ニ關シテハ民法編纂ノ際風俗習慣ノ
甚シク異ナレル外國人ヲシテ伊國人タル未成年
者ヲ後見監督セシムルハ不當ナル故ニ少ク臣一定ノ

年限以上伊國内ニ住所ヲ有スル外國人ニ非サレハ該職ニ当ル能ハストスベシトノ論モアリシカ絶対自由主義勝ヲ制シ遂ニ無條件ニテ外國人ニ後見人タルノ権利ヲ與フルコトヽセリ唯茲ニ注意スヘキハ伊國人ハアル法定ノ場合ニ於テ後見職ヲ行フノ義務アレ外國人ハ其意ニ反シテ後見職ヲ行フノ義務ナキモノトセルコト是レナリ是蓋シ後見職ナルモノハ私権ノ行使ノ一形体ナルモ重ニ國家ノ公益ニ基ツケル制度ニシテ公権トノ関係頗ル深キモノナル故外國人ニ対シ例外ヲ設ケタルモノナリ

七、外國人ハ全ク内國人同様各種ノ農業鑛業工業ニ従事スルヿヲ得ヘキヤ

八、若シ得サルコトヽセハ如何ナル取除ケアリヤ

本問ニ関シテモ外國人ハ伊國人ト全ク同一ナル権利ヲ有ス別ニ法令ニ積極的ノ明文ナシ民法第三條原則ノ結果ナリ

九、商船ニ於テ其士官又ハ船員ノ一部分ハ必ス内國人タルヿヲ要スルヤ

本問ニ付テハ伊國海商法第七十一條ニ詳細ノ明文アリ左ニ之ヲ譯出ス

第七十一條

商船ニ於テ船長又船員三分ノ二以上ハ必ス内國人タルコトヲ要ス

但シ在外伊國領事官ハ必要ノ場合ニ於テハ右ノ制限以外ニ外國人ヲ船員ニ用ユルコトヲ許可スルヿヲ得ベシ

船長及次長ノ職ハ實際内國人ヲ以テ之レニ充ツルコト能ハサル緊要ノ場合ニ於ケルニ非サレハ外國人ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得ス

法定ノ試驗ヲ經タル外國人ナキ場合或ハ領事官

カ外國人ヲ用ヒサルヲ相当ト信スル場合ニ於テハ法令上必等ノ資格ヲ備フル内國人ヲ船長トナスヿヲ得ベシ次長及副次長ノ職ニハ領事ニ於テ適当ト認ムル内國人ヲ以テ之レニ任スルコトヲ得ベシ

但シ此行職ハ一航海間ノミ有効ナルモノニシテ一航海間タリトモ法定ノ資格ヲ備フル内國人ヲ發見スル時ハ早速之レニ代ユルヿヲ要ス

十六、外國人ニ対シ新聞又ハ雜誌ノ發行ニ付特別ナル制限ヲ付スルヤ

何等特別ノ制限ヲ付スルコトナシ則チ伊國ニ於テ

ル外國人ノ出板權ハ全ク伊國人ノ出板權ト同一ナリ
伊國出板法第三十五條ニハ内國人出板ノ場合ノミ
規定シアレドモ是レ外國人ヲ除外セントスルニ非スシテ
外國人モ之レニ準シテ同樣ノ出板權ヲ得ルナリ

十一、外國語ニテ發行スル新聞又ハ雜誌ニ關シ何等制
限ヲ付スルヤ

何等ノ制限ヲモ付スルコトナク全ク伊國語ノ新聞
又ハ雜誌ト其取扱ヲ同一ニス

十二、外國人ハ政治上ノ集會ニ加ハルコトヲ禁セラレ居ル
ヤ

伊國ニ於テ外國人ノ政權ヲ有セサルコトハ已ニ已ニ說
明セルカ如シ然レドモ政治上ノ集會ニ加ハルコトニ關
シテハ何等ノ禁令ナキヲ故ニ全ク内國人ト同樣ナ
リ

十三、外國醫科法科大學若クハ醫學校法學校學
位證書ハ如何ナル場合ニ於テモ内國ニ於ケルト同種
大學若シクハ學校ノ學位證書ト同一ニ遇セラルヽ
モノナルヤ

十四、外國某大學若クハ某學校ニシテ前項ノ点ニ關シ特
典ヲ享有スルモノアラバ其校名如何

伊國以外ニ於テ受クタル学術試驗ハ尾テ伊國内ニ於テ無効トス然レトモ著名ナル外國大学ノ卒業証書ヲ有スルモノハ各科試驗ヲ経ストシテ直ニ全体試驗ヲ受クルヲ得ベシ又タル学科ニ関シ非常ナル学識ヲ備フルモノハ高等教育會議ノ決議ニ依リ勅令ヲ以テ右全体試驗ヲモ免除セラルベシ

右著名ナル外國大学トハ高等教育會議カ各場合ニ應シテ認定スル処ニシテ法令上何等ノ規定ナシト雖モ従来ノ前例ニ依レハ佛國四里、里昂ノ両大學英國カンブリッジ、オックスフォード、獨國伯林

大学等ハ伊國ニ於テ右ノ特遇ヲ受ケ居レリ

58